

# 草庵仏教

第130号  
(発行日)  
2001年4月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638126 西宮市  
小松北町1-2-3  
電話・FAX(0798)  
41-5346  
(発行人) 土井紀明  
メール naridoi.ne.jp@lycos.ne.jp  
http://members.tripod.co.jp/souan211

## 《 開法会ご案内 》

- \* 同朋の会(念佛寺)  
22日午後2時  
.....
- \* 聖典講座(浜屋西宮店)  
第1土曜日午後3時
- \* 念仏座談会(念佛寺)  
第3土曜日午後3時

## 人間死んだら終わりか？

**K**「今日一般には、(死んだらそれですべて終わり、お骨になるだけ)と、思っている人が多いのですが、人間は死んだらどうなるのでしょうか」

**D**「大変難しい問題ですね。(死んだら何も残らない)という考えは昔からありますが、こういう考えが自然科学の発達にともなうって、今日ではかなり一般化しています」

**K**「死んだら終わりだから、宗教的な救いを求めて苦勞する必要はないという風潮がありますね」

**D**「ええ、ですからそれは、未来永遠のために辛く苦しい修行をするとか、功徳を積むとか、信心を熱心に求めるという宗教的なエネルギーがそがれてきた大きな原因の一つだと思います。ことに現代の日本はこうした風潮がかなり顕著な国だと思います」

**K**「本当に人間は死んで焼いたら、後は骨と灰になるだけなのではないですか」

**D**「それを一緒に試みに考えてみましょう」

自然科学の発達にともなうって、人間の知覚(目や耳など)によって(検証して物の存在を確かめる)という、客観的に外から

物を観察をする姿勢が強くなりました。そのため、(人間の知覚で確認できないものは無いもの)だと、性急に結論づける傾向が強くなりました。

しかし、人間の知覚能力には限界がありますから、人間の知覚で確認できないものは無いとはかぎりません」

**K**「物の存在を電子顕微鏡で確認するにしても最後の確認は目という人間の知覚能力に頼りますからね」

**D**「ええそうです。そして、人間の知覚によって確かめられるものは(何か形のあるもの)だけですが、(色も形もないもの)もあります。たとえば(心)とか(いのちそのもの)とか(気)などはその代表的なものです。心の実質は、人間の知覚によって外から認識できないですね。確認できるのは神経細胞(ニューロン)の構造と働きだけではないでしょうか」

**K**「人間が死ぬということ、今日では脳死ということで、脳の神経細胞(ニューロン)、ことに脳幹が機能しなくなることですね」

**D**「ええ。脳の神経細胞は多くの神経繊維の集まりで、この神経繊維は物理的化学反应をして

互いに信号をやりとりしている、それが脳の働きだといわれています」

**K**「そうすると脳が死ぬというのは脳の神経細胞が物理的・化学的な反応をしなくなることですね」

**D**「そういうことになりませぬ」

**K**「脳の神経細胞が働かなくなったら、心も意識も無くなると、一般に思われていますが」

**D**「人間の知覚を通して、人間を外から見る限りでは、(神経細胞が働かなくなると心も意識もすべて無くなる)、と見えますからね」

**K**「人間を物として外から見ると立場からは、心も意識もすべて神経繊維という物質的な働きの中に納まっているという考えになつてしまいませんか」

**D**「ええ。こうした考えは、意識や心といった細胞という物質内部のものに過ぎないという考えで、いわゆる唯物論ですね。しかし、はたしてそういうものであるのかという疑問が出てきます」

脳の神経細胞を調べても、あれは意識をただ外から見ているに過ぎず、意識内容や心そのものは知られないですね。たとえば今、私が今何を考え、どう感じているかは、神経細胞の働きを分析しても分からない」

**K**「そこですね。しかも意識とか心は私にとっては人生に最も

親密なものです。人を愛したり憎んだりするのも、うれしいも悲しいも、喜びも嘆きも心です。音楽を聞いて美しいと感じるのも意識です。意識の内容こそ私の人生の実感的な内容といつていいほどです」

**D**「そうですね。ことに、物事を判断し、選択して決定するのは意識であつて、そこにこそ(私)があるといえます。もし人間の意識や心が脳神経の物理的・化学反応にすぎないのなら、どうして音楽を聴いて美しいと感じるのか、あるいは親に死に別れると悲しいと感じるのか、あるいは自分を犠牲にしてまで他者のために働こうという尊い決断をなしているのか、理解できないですね」

先日、電車のホームから線路に転落した人を見て、危険をかえりみず線路に飛び降りてその人を助けようとしたけど、自分も電車にひかれて亡くなられた韓国の人がいました。こうした自己犠牲的な行為をしようとする判断はその人の神経細胞の化学的な反応でしかないのでしょうか。いろんな可能性の中から、自分の行いや生き方を選択する、そういう判断して選択する主体が私ですが、その私がいろいろな選択肢のなかから何を並び、どう行おうかは、単なる神経細胞の反応のメカニズムだということでは、とても納得できませんね」

**K** 「いろんな中からあれかこれかど選択したり、意欲したりする自由意志にこそ自分らしさがあります。そういう（自分）は脳神経の化学的・物理的反応をいくら調べても出てこないように私も思います」

**D** 「意識の領域は非常に深いものであることはますます明らかになって、今日では深層意識とか無意識の領域ということもいわれています」

そして（自分）とか（私）というものは意識の領域でこそいわれるのであって、脳神経の反応をいくら外部から分析し観察しても（自分）とか（私）は出てこない。私が現在何を考え、何を経験し、何を感じているかは、外から科学的な装置で観察し分析しても到底分かるものではない

**K** 「そうすると肉体や脳細胞を含めて自然の物質的な領域と、意識の領域は区別されるべきことなのではないか」

**D** 「そう思います。意識をいくら重ねても物にはならないし、物をいくら重ねても意識は生まれないといわれていますね。物の世界と意識の世界は別であって、物の世界をいくら分析しても心の世界は分からない」

意識を私の内側から見ると、まさに人生そのものの内容であり、喜怒哀楽などの感情、思考し判断し決断する、過去を回想

し未来を夢見るなどなど、じつに身近で豊富な経験の世界です。

ですからフランスの哲学者でノーベル賞受賞者のアンリ・ベルクソンは「意識は脳をほみだして、脳の一部になること（はない）」といっているそうです

**K** 「意識は脳に納まらず、脳を超えているとなると、脳と意識とはどういう関係があるのでしようか」

**D** 「それも大変難しい問題です。私自身は、意識の領域と物質の領域との回路となっているものが脳であると仮定してみたら、理解しやすいと考えていますが」

外の物質的なもの、たとえばイスとか電車などの物体あるいは音の振動や肉体などの物質的なものを、意識の領域に伝達する機能が脳で、脳の回路を通して外の物の刺激や形が、表象として意識の領域に取り込まれるのではないのでしょうか。

逆に意識で考えたことや感じたことや経験されたことは脳を通して、外の肉体に伝達して体で表現する、即ち行動するのですね。友を懐かしんで手紙を書いたり、美しい景色に感動して絵筆をとったり、気晴らしのために散歩をしたりします。イライラしたときに胃が痛くなることも心の状態が外の肉体に表れたといえましょう」

**K** 「なるほど、脳は外の世界と意識の世界の間をやりとりする

窓口のようなものということですね」

**D** 「まあ、現在の私はそう理解しています。断定するつもりはもちろんありませんが」

とにかく意識の領域は非常に深く、物質（脳細胞）のなかに納まりきれないと思えます。

ベルクソンは「意識は、外套（脳）に掛けられた外套（脳）の一部にはならない」といっています」

**K** 「意識の世界と物質の世界は異質だと」

**D** 「異質というか、領域が違うといった方が正確だと思います。ただお互いに深く関わりあっていると思います」

**K** 「では人間の死、いわば脳死になるとどうなるのでしょうか」

**D** 「外界の物や人などの物質的な世界と意識の世界とを結び回路が働かなくなることはないのでしょうか。ですからもはや物質的な自然も他者も見えないし、感じられなくなる。脳死は、脳という相互の伝達回路が働かなくなるのだと思います」

しかしそのことは意識の世界が全く無くなってしまうとはかならずしもいえないでしょう。ちやうど家の内と外の通路としての窓（脳）があり、その窓が閉まっても、家の内があるように」

**K** 「脳が死ぬことは意識の全領域の消滅をかならずしも意味し

ないということですね」

**D** 「ええ」

**K** 「だとすると肉体が死ぬ、いわば脳が死んでも意識の領域が残る可能性があるということですか」

**D** 「意識は何らかの形で死後相続されるということもありえると思います。仏教ではそういう意識の連続性を説いています。もつともこの場合の意識は私たちが見たり聞いたりする知覚的な表層の意識ではなくて、もつと根源的な深層意識だといわれています」

**K** 「肉体が減んでも、深いレベルの意識が続く可能性があるということですね」

**D** 「ええ。肉体が減ぶといわれますが、あれは本当は減ぶのではなくて、形態が変わったのでしょう。分子レベルでは続いているのではないですか。氷が溶けたら水になり、水は蒸発して蒸気に変化するように、ある物はなくならず変化するだけ」です。それが質量保存の法則であって、肉体の死といっているものは、人の肉体という枠組みがはずれて、肉体を形成していた物的エネルギーが分解し、違った形に変化したのではないですか。変化の形の一つが骨や灰なのでしょう」

**K** 「だとすると、意識も無くならず変化していくことも考えられるのですね」

**D** 「ええ。（あるものは無くならず変化するのみ）」という道理からもそういえます。死後どういう形で意識が相続するのかわよく分かりませんが」

東大の名誉教授で仏教学の大家であった玉城康四郎博士は「自分の深い禅定体験に照らして、かなりつつこんで死後に存続するものについて論じておられます。死後、微細な目には見えない身（業熟体）が相続するとまで博士はいつておられます」

**K** 「そうすると一般に自己とは主体であり、それは意識であるといっているから、死んでも自己は無くならず続いていくといえるわけですか」

**D** 「そういう可能性があると思います。断定はできませんが」

ただ私が今回いいたいのは、（肉体の死、いわば脳死で一切が無くなる。心も意識も一切消えて無になる）という考えは、果たして本当にそうであろうか、必ずしもそうはいえないのではないかと考えるからです」

**K** 「もし肉体という形は無くなっても、深い意識としての自分（業体）が続くとすると、自己は一体どこへ行くのか、どうなっていくのかという問題が真剣な問いとなりますね」

**D** 「ええ。古来（後生の一大事）というのはいくつかの問題であつたといえましょう」

# 真宗聖典講座

よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどによるこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたまうべきなり。よろこぶべきころをおさえて、よろこばせざるは、煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときわれらがためなりけり

（歎異抄第九章の一節）

現代語訳「よくよく考えてみると、天におどり地におどるほど喜ばねばならないことを、そのように喜ばないわが身をおもいつけても、いよいよ往生は一定の身であると思いません。というのには、喜ぶべき尊いおみのりをいただいて、喜ぼうとする心をおさえとどめて喜ばないのは、煩惱のしわざです。しかるに仏は、このような私であることをかねてからお見とおしのうえで、煩惱具足の凡夫を救おうとおおせられていることですから、他力の悲願は、このように浅ましい私どものためでありました」と。

## 〈歎異抄第九章第四講〉

ひとたび如来の本願を信じて念仏申す身となつたものは、無量寿経には「必ず超絶して去ることを得て、安養国に往生せよ。横に五悪趣を截りて、悪趣自然に閉じん。道に昇ること窮極なし。」（意識……必ずこの生死の流れを超え離

れて浄土に往生し、ただちに輪廻を断ち切つて、迷いの世界に戻ることもなく、この上ないさとりを開くことができる）と、説かれています。（現生不退転の身）、すなわちすでにこの世において、浄土に往生してもはや再び迷いの境界に戻ることはない（へ身）にさせていただくのであります。

われわれは長い間流転して、いつ果てるとも知れなかつた、その永き流転も今生を限りとして、もはや迷うことのない浄土に生まれてこの上ない悟りを開かせていただくのであるという、これは念仏をいただいた者にとってはまさに「天におどり地におどるほどによるこぶべきこと」であります。

唯円房はかつて初めて如来の本願にであつたとき、こうした踊躍歡喜の経験があつたのでしょうか。しかし、現在とてもそれほどの喜びがないのはどうしたことであろうかと、不審が出たのです。

この不審にたいして親鸞聖人はご自身の上にも同じ問いをもっておられて、そのことをさらに深く如来の本願に聞思しておられたのでした。

そこで、「喜ぶべき心を抑えて喜ばせないのは煩惱のしわざなのだ」と聖人は仰せられました。

聖人はなんと深く自分の姿を観ておられるのであろう、と驚かすにはおれません。法の喜びが薄いことを嘆く唯円房の聞法の志も尊いことですが、それを「煩惱のしわざ」と慚愧しておられる聖人のお言葉がさらに深い感銘をおぼえます。

私などは喜びが少ないことを問題にしないほど自己内観の心が乏しく、また喜びが乏しいことを当たり前にしてしまつ

て、それが己の煩惱のせいであるとは気がつかぬほどの鈍感さであります。自分では何とも思っていないことも、自分の悪業煩惱から起こっていることをあらためて知らされます。

そういう意味では、この世のことにかまけて仏法に心を寄せることが後回しになりがちなのも、己の煩惱のせいであるし、この上ない功德の宝であるお念仏をいただきながらも、なおこの世の損得に心を煩わせていることも、煩惱に動かされてる姿であります。

次に「しかるに仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおおせられたることなれば」との仰せです。これほどの煩惱深き身であることは、阿弥陀仏がすでにちやんと知り抜いてくださつてあつたことで、私が事新しく知つたものではないと仰せられます。

私もならこういう場合、自分の「内観の深さ」を誇りたくなるところです。たとえば「これほどまでに自分は自分を反省できている。どんなものだ」というような矜持の思いすら起こります。

ところが、聖人は「仏かねてしろしめして」と、阿弥陀仏の五劫思惟の恩を仰いでおられます。聖人は「我知れり」というところにはおられません。

こうしたことから思い知らされることは、私の悪業煩惱の深さを本當に知っておられるのは阿弥陀仏であつて、私が知りえる罪業の深さは己の罪業の一部ではないのでしよう。

正信偈に「極重悪人唯称仏」とありますが、私のことを「極重悪人」と本當に知っておられるのは阿弥陀仏であつて、

「極重悪人」と教えられても、とても「極重悪人」とまでは思えない、それほどの愚鈍の身であります。

自分の反省心とか良心で自分の煩惱を煩惱と知ることはありません。しかし、自分の反省心とか良心での自己批判は、どこかで自分を肯定した上でのみ自己批判をしているように思えます。全面的に自分が悪いというような自己批判には耐えられないのが、自分（自我）ではないでしょうか。

自分が自分を全面的に自己否定すると、生きるのが耐えられなくなつて自殺するのがオチかなとさえ思います。だから、そこまでの徹底した自己批判を、私たちはいつも無意識的に避けていて、どこかで自分を肯定しているのではないのでしょうか。

昔、N先生から「自分で自分の皮膚をツネル場合は、どれほど自分をツネツネも肉がさけるほどツネツネないものだ」といわれたことがあります。

聖人は「私はこのように深く自分を知りました」とは申されていません。「仏かねてしろしめして煩惱具足の凡夫とおおせられたる」とのご領解です。如来の間観察をお聞かせいただいて、知らせていただいているという、どこまでも如来の恩を仰いでおられるのであります。まことに畏れ入ることです。（了）



儲けた資産を世の人々のために使おうとする人が  
極く少ないのは寂しいことである。

\*三月十七日。念仏会に石川県からTさんが来ら  
れる。ご自宅を聞法道場にされた尊い志のお方で  
ある。

\*三月二十一日。朋友会。T師の綿密に用意され  
た発表に感銘。共に学ぶことの楽しさを味わう。